
世田谷区立郷土資料館

資料館だより

No.72

2020.3

大場家住宅改修記念

大場家の歴史と代官屋敷

－ 会期 令和元年 11 月 30 日（土）～令和 2 年 4 月 30 日（木）



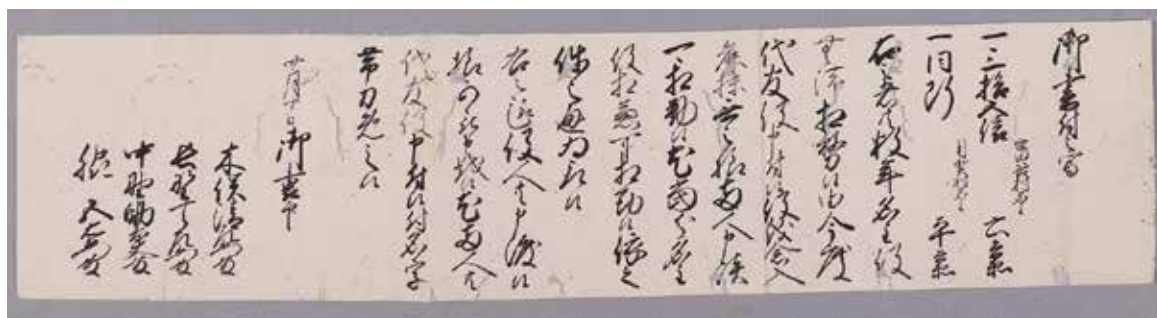
大場代官屋敷茅葺き風景
撮影 八大建設株式会社

大場家住宅は、彦根藩世田谷領 20 ヲ村の代官を世襲した大場家の役宅（執務所兼住居）で、今から 300 年近く前に建てられました。

このたび、大場家住宅を文化財として広く公開、活用するために改修工事が行われました。

この改修工事完成を記念して、大場家所蔵の古文書や調度品、絵画を展示しています。殊に大場家の再興に尽力し、民政に意を尽した代官である弥十郎が残した著作は、当時の代官家の性格や仕事ぶりを知る上で大変貴重な史料です。

生まれ変わった大場家住宅、そして、代官という重責を担った大場家の歴史について、皆様の関心を深める一助となりましたら幸いです。



【翻刻】

御書付之写

一、三拾五條 世田谷村名主

六兵衛

一、同断 用賀村名主

平兵衛

右之者共数年名主役

無滞相務候由、今度

代官役申付候、役儀念入

塵抹無之様兩人申談

可相勤候、尤当分名主

役相兼可相勤候、依之

件之通為取候、

右之趣役人共申渡候

様可被申越候、尤兩人共

代官役申付候付、名字

帯刀免之候、

四月十日

御裏印

木俣清左衛門殿

長野十郎左衛門殿

中野助太夫殿

脇五右衛門殿

世田谷代官の職務

寛永10年(1633)、彦根藩2代藩主井伊直孝は、下野国佐野と武蔵国世田谷に2万石の加増を受けた。このうち、武蔵国に与えられた領地が彦根藩世田谷領(現世田谷区・狛江市)と呼ばれる。世田谷領の支配を担ったのが世田谷代官である。世田谷代官として取り立てられたのは、中世に世田谷を支配していた吉良氏の旧臣・大場氏であった。当初、大場本家の当主が幼少だったため、代官職に就いたのは分家の大場市之丞で、本家当主は世田谷上町名主と問屋役(宿場の差配役)を務めることとなった。その後、元文4年(1739)、当時の世田谷代官市之丞が年貢未納の責を問われ追放となると、本家7代目の当主・六兵衛が代官となり、相役として用賀村名主・飯田平兵衛も代官に取り立てられた。飯田代官は、2代で免職されたものの、大場家は以後幕末まで代官職を務めた。

世田谷領は、彦根藩の領地30万石の内、わずか2,300石にすぎない。しかし、彦根藩の領地の中でもっとも江戸に近いという地理的条件から、江戸藩邸に必要な物資や労働力の供給地としての役割が求められた。このため、世田谷代官の職務は多岐にわたり、年貢納入や領内の治安維持に関わる仕事以外にも多くの仕事があった。

たとえば、正月飾り用の竹木、節句用の餅草(ヨモギ)、菖蒲など年中行事で使う品々や、日常生活で使う物資を調達し、江戸藩邸に納入することも世田谷代官の仕事であった。さらに、藩邸の普請・草刈・米搗きなどに使役される人足や、豪徳寺(井伊家菩提寺)で行われる法要や葬儀の際に必要なとされる労働力を世田谷領内から徴発しなければならなかった。

第10代当主大場弥十郎

こうした世田谷代官の職務については、民政に意を尽くした名代官として知られる第10代当主大場弥十郎が、その著書の中で次のように嘆いている。「世田谷領は村数が多く支配が大変である。江戸に近いため彦根藩邸の御用も多いのに、部下もつけてもらえない。それにもかかわらず代官の業績としては評価されない。縁の下の力持ちとはこのことを言うのだ」（『公私世田谷年代記』）。このように嘆きつつも、弥十郎はその在職中、農民負担の軽減や藩への御用金上納に尽力するなど多くの取り組みを行い、文政11年（1828）には一代限りの^{かち}徒士（武士の身分の一つ）に取り立てられた。

この数年後、弥十郎は大小^{こしらえ}拵（刀と脇差の外装具）を製作している。黒^{くろいろ}蝋色塗りの鞘で、柄には金無垢^{きんむくはいろゆう}這龍^{めぬき}の目貫が置かれる。筭^{こうがい}（鞘の表側に収められた髪を整える道具）、小柄^{こづか}（鞘の裏側に添えられた小刀、^{ふちがしら}縁頭（柄の両端に付けられている金具）にはそれぞれ大場家の家紋が施され、いずれも「大岡政次（花押）」の銘がある。政次は江戸時代後期の金工で、のちに尾張徳川家の抱工となっている。なお、この拵に関しては、弥十郎による詳細な注文書が残されている。注文書には、鯉口（鞘の口の部分）には高級な角を用いること、鞘にはしっかりと枯らした会津産の^{ほお}朴の木を使うこと、鞘の形はあまり丸くなりすぎないこと、とは言っても平たすぎる形も良くない、時々息子がそちらに行くから、よく相談して作って欲しい、などと事細かな要望が記されており、この拵製作にかけた弥十郎の思いが現れている。



黒蝋色塗鞘大小拵（写真は大的のみ）



縁部分拡大



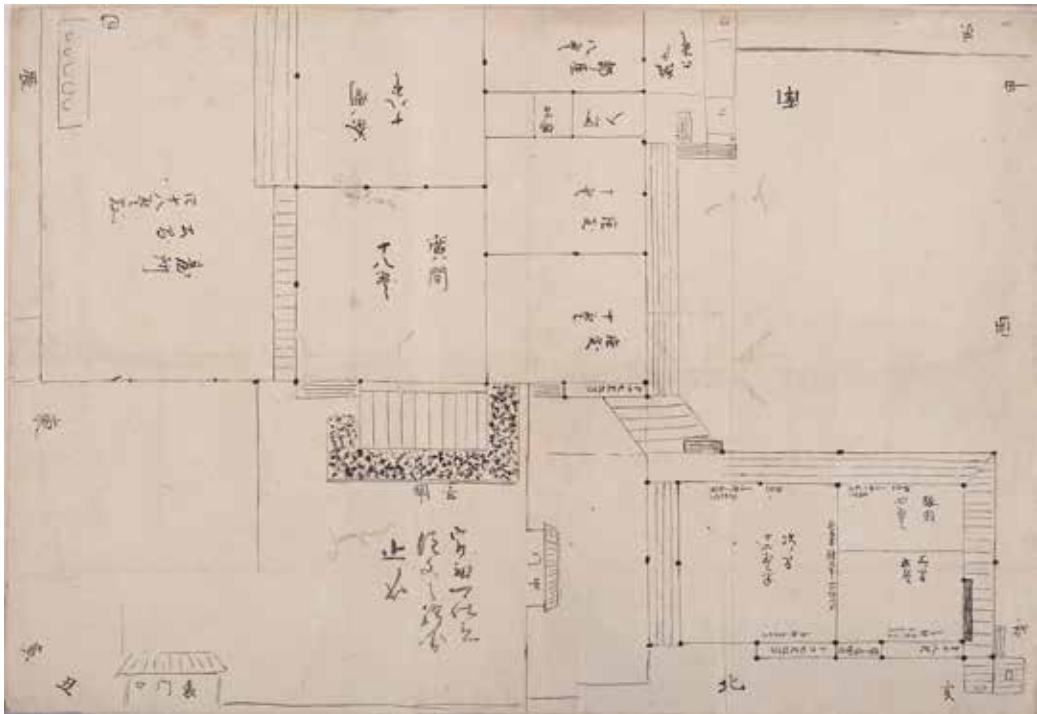
小柄部分拡大



小柄裏面



頭部分拡大



屋敷仕立注文の絵図 文化元年（1804）頃

大場代官屋敷の空間と畳

大場家に関する最も古い図面は、文化元年頃に代官弥十郎が書院座敷建替のために作成した絵図である。書院座敷の間取りや、建具・床の寸法など細かく記入されている。一方で、主屋の南側は建替には不要だったのか途中で切れている。また、二階座敷の増築前であり、名主詰所、階段室などはない状態である。

主屋は家族が生活をする住居であり、同時に代官が執務を行う役宅であった。これを空間的に分けると、南側は茶の間、仏間、押入、部屋、納戸など、主に家族の生活空間。一方でボロ市通りに面する北側は、公務、接待するための広間や座敷、それから佐野奉行の巡回や社寺へ御朱印を渡す場所として使用される書院座敷など、執務空間であった。

また、そうした部屋の使い方の違いは弥十郎が記した『金銭出入帳』にも表れている。『金銭出入帳』は、日用品や年中行事、建築修繕、職人への給料などの支出が詳細に記載されており、生活の一端を垣間見ることが出来る史料である。

そこで今回は、畳に関する記述を見てみる。寛政12年（1800）から文化15年（1818）の記録の中で、畳の購入などに関する記述が全63件、そのうち琉球畳（表）に関する記述が8件ある。

琉球畳は七島藺しちとういという藺草いぐさを材料に織られた縁なしの畳で、かつては一般的に普及していた畳である。同史料によると、大場家では、琉球畳は「茶ノ間」や、「玄関・小座敷・勝手」など、家族の生活空間に使用されていた。

一方で執務空間である座敷や書院座敷は「へり付」の畳を入れており、特に「近江畳（表）」を材料問屋から仕入れている。つまり、設えにおいても生活と執務空間との間に差がつけられていた。



はさみぼこ
挟箱



丸に並び矢



箱枕



けんかたばみ
丸に剣酢漿草

大場家の家紋

家紋とは、家々によって引き継がれた特定の文様を指す。日本の紋章のモチーフは多岐にわたり、『日本紋章学』では天文・地文、植物、動物、器材、营造物、文様、文字、図譜の8種に分類している。

家紋は平安時代に貴族が自分の牛車の目印として用いたのが始まりとされ、その後は戦場において敵味方を区別するため、陣幕や幟、馬印などに付けられた。戦乱が無くなった江戸時代以降、礼服に家紋をつけることが定められるなど儀礼的な側面で重用され、大名の家格、家系を表す重要なシンボルとして扱われた。

現在、大場家では2つの家紋を持ち、いずれも初代信久と二代房勝の頃から併用され始めたという。

1つ目は大場家の表紋である「丸に並び矢」^{おもてもん}。表紋とは各家で公に定めた家紋のことをいう。モチーフは矢を安定させて飛ばすための矢羽根を象ったもの。矢は武具であると同時に、破魔矢などあるように邪気を払う力があると信じられていた。

2つ目は「丸に剣酢漿草」。大場家では女性のみが用いる裏紋として扱われている。酢漿草はクローバーに似た多年生の植物で、その優美な形が好まれ古くから用いられている。また、切り払っても生えてくる生命力があり、その繁殖性から家紋にされたという。植物の中では桐に次いで流行した家紋でもある。

大場家の美術

絵画は5件(9点)展示しているが、天袋小襖絵である安田雷洲筆「英仏攻防戦図」と佐竹永海筆「富士図」の両作品以外は今回が初公開となる。「英仏攻防戦図」は過去に数度展示しており、図録『大館蔵品展』(2014)など複数の当館刊行物にて解説がなされている。また、「富士図」も『資料館だより』No.25(1996)で詳述している。両図についてはそれらをご参照いただくこととし、ここでは江戸時代後期に制作された初公開の三作品(いずれも現状軸装)について、若干の解説をしておきたいと思う。



①達磨図 金山覚城筆

画面斜め左を向く、面部を強調した定番の肖像。速筆簡素ながら筆には勢いがあり、なかなか見事である。大場家文書中の『文政九年正月 万留帳』によれば、この年の4～5月頃に表装された書画四幅のうちの一幅が「覚城達磨画同 壹幅」とあり、本作品はこれに該当する画と思われる。紙本墨画で、法量は縦60.1cm、横58.8cmを測る。

覚城とは覚城東際(かきじょうとうさい)(?～1823)のこと。新潟出身の曹洞宗僧で、豪徳寺第15世住持・靈潭魯龍(れいたんろりゅう)の法系に連なり、覚城自身も豪徳寺第20世住持を務めている(文政3～6年)。大場家からの依頼で制作されたものであろうか。なお、画上部の自賛は以下のとおりである。

「香至王宮一顆球／拈来誤向暗中搜／唯除断臂師僧文／按劍叫奇四百州 金山覚城」



②馬図(写真は部分) 隣松茂銀筆

習画の馬図をそのまま作品にしたかのような略筆の一品。軽妙な筆運びは手慣れており、形態把握も無難である。本図は、大場家文書中の『文化十五年正月 金銀出入帳』文化15年(1818)6月18日の条に「隣松馬画 一幅 張直し…」とある作品に該当するようである。制作年は当然隣松の没年以前だが、現時点で特定はできない。紙本墨画で、法量は縦108.6cm、横52.3cmである。隣松茂銀とは加藤(鈴木とも)茂銀のこと。江戸の人で、幕府与力を勤めた。隣松は画号で、奥絵師木挽町狩野家の狩野栄川院典信(えいせんいんみちのぶ)が画の師。山水人物を得意としたという。生年不詳で没年が享和2年(1802)とされる。



③墨梅図 主馬助有祥筆

本作品は、主幹を左寄りに配し、枝を上下二所から右方へ伸ばす構図をとる。墨の濃淡により遠近感や立体感を表すが、主幹の濃墨部分には、たらし込みのような描法も見受けられる。下方の枝振りには達筆で、筆者の技量が垣間見える。紙本墨画で、法量は縦 114.3cm、横 43.7cmである。

筆者の主馬助有祥については定かではないが、芝西応寺西町に住む絵師だったようで、龍山とも号した。文化文政期の大場家文書に度々その名が散見され、大場家屋敷内座敷の襖絵や杉戸絵なども描いていることが分かっている（『文化十四年正月 金銀出入帳』・『文政二年正月 金銀出入帳』）。また、上京する龍山に大場家から餞別が渡されるなど、絵師と注文主という関係に止まらない深交のあったことが窺える。

上記三件の作品は、いずれも文書史料から入手時期などが明らかで、歴史資料的価値を有する点で貴重な作品と位置付けられよう。

文責 当館学芸員 角和裕子（2～3頁）
松浦瑛士（4～5頁）
鈴木泉（6～7頁）

元年度 主要事業報告

特別展・企画展・季節展

季節展「螢とさぎ草伝説」	6月22日（土）～7月28日（日）
ミニ展示「すこし昔の世田谷一米づくり」	8月3日（土）～9月29日（日）
特別展「近代世田谷消防史 町の発展と防災」 ※関連事業：ギャラリートーク、消防半纏を着てみよう！	10月26日（土）～11月24日（日）
季節展「ボロ市の歴史」 ※会期中に展示解説8回実施。	11月30日（土）～2年1月26日（日）
企画展「大場家住宅改修記念 大場家の歴史と代官屋敷」 ※会期中に展示解説2回実施。	11月30日（土）～2年4月30日（木）
ミニ展示「すこし昔のくらし—ご飯をつくる・食べる」 ※関連事業：出張展示（於 中央図書館）	2年2月1日（土）～3月1日（日）

野外歴史教室

コース名	実施日	講師	参加人数
次大夫堀と周辺の文化財を巡る	5月30日(木)	松浦瑛士(当館学芸員)	12人
荏原台古墳を歩く	5月17日(金)	久末康一郎(文化財係学芸員)	17人
吉良氏の旧蹟を訪ねる～目黒地域	11月8日(金)	鈴木泉(当館学芸員)	29人

講座

講座名および実施日	講師	参加人数
漢詩漢文鑑賞講座(全5回) 5月14日～6月11日の毎週火曜日	村山吉廣(早稲田大学名誉教授) 重野宏一(区史編さん委員会近世部会調査員)	延231人員
民俗学講座「飲酒文化の変遷」(全2回) 5月17日(金)・24日(金)	松浦瑛士(当館学芸員)	延52人
夏休み親子香道教室 8月18日(日)	公益財団法人お香の会	19組38人
美術史講座Ⅰ 「釈迦の美術」(全6回) 11月3日～12月8日の毎週日曜日	村松哲文(駒澤大学教授) 山田磯夫(元早稲田大学教授) 金子典正(京都造形芸術大学教授) 片岡直樹(新潟産業大学教授) 樋口美咲(東京藝術大学大学美術館学芸研究員)	延247人
歴史講座「近世文書解読入門」(全4回) 2年2月5日～2月26日の毎週水曜日 ※3月25日までの全8回の開催予定であったが、新型コロナウイルス対策のため4回で中止。	角和裕子(当館学芸員)	延182人
美術史講座Ⅱ「江戸の神仏表現」(全3回) 2年2月7日～2月21日の毎週金曜日 ※2月28日までの全4回の開催予定であったが、新型コロナウイルス対策のため3回で中止。	鈴木泉(当館学芸員)	延142人

《新収集資料》

○寄贈資料

代沢小学校卒業アルバム(昭和40年)ほか計11点、学徒動員表彰状ほか計4点、会員証(帝国軍人後援会有功会員任命状)ほか計105件、弥生式土器ほか計6点、女書翰初学抄ほか計39点、鳶口(長柄)1点、朝日新聞(昭和17年3月7日)ほか計25件、8ミリフィルム(1963年頃のポロ市風景)1点、宝篋印塔2件、槍(銘:武蔵国住相馬吉兼作)1点、湯島聖堂・湯島仮聖堂絵葉書1点、ちゃぶ台1点、深澤尋常小学校卒業記念写真(昭和3年)ほか計31点

○寄託資料

旧太子堂村森家文書(第三次)計50点、太田子徳書写「農業全書」ほか計32点、喜多見村検地帳ほか計20点

○移管資料

世田谷区都市整備政策部都市デザイン課
世田谷百景切絵 116点

○購入品

唧筒略図(明治26年)、消防組永代記録(昭和5年)、町火消装束之図(昭和54年)、新発明保険付汲込唧筒発売広告(明治時代)、碓房録摘鈔(嘉永7年)

資料館だより	No.72
発行年月日	令和2年3月31日
編集発行	世田谷区立郷土資料館 〒154-0017 世田谷区世田谷1-29-18 ☎ 03-3429-4237 FAX 03-3429-4925 広報印刷物登録番号 No.1842